クリスマスの約束

星 明莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クリスマスの約束

【Ｎコード】
Ｎ７７０５Ｆ

【作者名】
星　明莉

【あらすじ】
０８年クリスマス記念小説。中学生になったコナン君と歩美ちゃんのお話し。７年の月日が経って、すっかり雰囲気の変わってしまったコナンに、歩美が誓った雪の日の優しい約束とは―…？至らない文章力のお陰で中途半端なラストですが、クリスマスらしい甘くて切ないストーリーをお送りします。

すっかり冷え込む季節となった。
歩美は風で崩れるマフラーを直しながら、寒い通学路を静かに歩いていた。
そんな歩美の目の前には、寒さなど感じないかのようにはしゃいで登校する小学生の姿があった。
「いーい？赤いところ踏んだら負けだよ！」
「わかった！よーいどんっ」
そう言って、路面にある赤いレンガの部分だけを避けて走る子供たち。
ああ、自分たちも昔はよくやっていたなあ。
歩美はあまりの微笑ましさに顔をゆるめた。

中学生。

気が付けば、7年もの月日が経っていて。
見るもの触るもの、世界の全てが昔と違う。
歩美たちはそんな年頃になっていた。

「おはよう、元太君！光彦君！」
「よぉ歩美！オレの今日の弁当は天ぷらだぜ！」
「元太君はまた天ぷらですか…」
「ふふ、元太君天ぷら好きだもんね」

中学生と言えども、まだまだ子供っぽさを引きずる同級生達。
その中で、コナンと哀だけはどこか特殊でアダルトな雰囲気を持っていた。
いつも毅然としていて、口調も大人じみている2人。

哀は昔からそのような振る舞いをしていたと言えるだろう。
この7年間で大きく変化を遂げたのは、コナンだった。
年齢を重ねるごとに減っていく口数。
授業中はいつも上の空。
人との関わりを極力避けていて、1人で行動することが多くなった。
近寄りがたく、群れない獣のような印象を持ち始めたコナン。

「コナン君、この頃どうしたんだろうね…」
ある日の学校帰りに、歩美は哀にそう問いかけた。
「どうした、って？」
哀は興味のない様子で聞き返す。
「だって…いつもつまらなさそうな顔してるし、一緒に喋ってくれないし…」
「ああ…気にしない方がいいわよ。きっと彼、勝手に被害妄想してるだけでしょうから」
「う、うん…」

そんなコナンが級友から疎まれ始めるまで、そう長くはかからなかった。
異質な存在は排除すべきという空気はあっという間に感染する。
コナンに対してのスケープゴートは当たり前で、次第に嫌がらせを始める人も少なくなかった。

ねぇ、哀ちゃん。
“気にしない方がいいわよ”って…。
それは歩美が無力だから？
どうすることも出来ないから？
だから哀ちゃんはそう言ったのかな？

うすうす分かってはいるけれど、でもね。
何も知らない、で済まされる子供ではもういたくないんだよ…。

★

１２月２５日、クリスマス。
この日で今年の登校は最後となった。
終業式を終え、校門からばらばらと帰宅していく帝丹中の生徒たち。
「哀ちゃん、帰ろう！」
歩美は下校準備の整っていない哀の肩を叩いて言った。
「ごめんなさいね…私、ちょっと先生に呼ばれてるのよ」
「あ、そうなんだ…」

じゃあ、一人で帰ろうかな。
歩美は少しばかり騒がしい廊下をとぼとぼと歩き出す。
そのまま通学路に出て丸裸のイチョウ並木の下に差し掛かった時だった。

頬に触れる冷たい気配に気が付いた。
気になって髪を払うと、ねずみ色の曇り空が一面に広がる。
そしてその空からは地上に向かって、深々と白い雪が降っていのだ。

「わぁ、ホワイトクリスマスだ…♪」

歩美はしばらくその幻想的な風景に見とれていた。
きらきらと光る雪の粒が、アスファルトに辿り着くと音もなく消えてゆく。

ふと遠くに目をやると、うっすらと空を仰ぐ人影が見えた。
向こうにいるのは。
「コナン君…？」
歩美は目を凝らしながらその影に近づいていった。

「コナン君！！」

痺れを切らして思わずその名前を呼ぶ。
彼は驚いたように振り返った。
「歩…美」
「雪だね…！！」
同じ瞬間（とき）に同じ空を見上げていたことが嬉しくて、歩美はにっこりと微笑む。
それと同時に思った。

彼と、ちゃんと目を合わせたのはいつ振りだろう…と。

コナンは歩美の少し前方を静かに歩く。
歩美は引き離されないように付いていった。
「…何？」
「えっ？えーと…」
歩美は突然の冷ややかな彼の視線に、思わず目を逸らす。

少し戸惑ったが、思い切って口を開いた。
「コナン君って、何をそんなに悩んでいるの？」
「…関係ない、だろ？」
コナンは吐き捨てるように言って、スタスタと先を歩きだした。
歩美も負けじと歩くペースを速める。
「待ってよ、歩美何も出来ないけど…話を聞くことくらいなら」
「いい加減にしろよ！！」
「！！」
コナンは歩美の話を遮るように怒鳴った。
「カウンセラー気取りか？ふざけんな、オレの悩みが嫌がらせに遭ってることだと思ったら大間違いだぞ…！！」
だんだん鬼気迫るコナンの表情に、歩美は半歩後退りする。
コナンは歩美から顔を背けて続けた。
「相談なんてしたところで意味がないんだ！！オメーなんかに話して変わる問題じゃねーんだよ！！」
「うそつき！！」
今度は歩美が大声で言った。

「そう言って諦めようとしてるだけのくせに！！未来を変える努力なんか、何もしてないくせに…！！逃げないでよ、コナン君のバカ！！」

歩美はそう言い切ると、すぐ傍の公園に駆け込んだ。
雪はあれから強さを増し、うっすらと積もりだしていた。
歩美はゆっくりとブランコに腰を掛ける。
背後に人の気配と雪を踏む音がした。
気配の主は恐らくコナン。
彼も歩美を追って公園に入って来たのだろう。

そう察した歩美は言った。

「コナン君はいつになったら歩美のこと頼ってくれるの…？」

足音はまだ続く。

コナンもブランコに近づいてきた。

「歩美は昔からコナン君に助けられてばっかで…勇気もらってばっかで…」

もう中学生だもん、わかるよ。

自分ばっかりあなたに頼っていたということ。

「だから今度は歩美が力になりたいの…」

少し勇気を出して、歩美は頬を微かに紅潮させる。

次の瞬間だった。

その熱を持った頬に、ひやりと冷たさを感じたのは。

コナンは冷たくなった腕で、歩美を後ろからそっと抱きしめていた。

「ごめん…今だけ…」

鼻をすする音と、途切れ途切れにつく小さなため息。

もしかして…泣いているの？

「コナン君…」

歩美の首に絡まるコナンの腕は小さく震えている。

こんなになるまで…ずっとずっと苦しんで。

…いつも一人で何を思っていたの…？

「泣くくらいなら…素直になればいいよ…！」
歩美はそっと呟いた。
コナンもその言葉に反応して、ゆっくり顔を上げる。
歩美はコナンの腕を振り払い、ブランコから立って振り向いた。
冷たくなった彼の手をぎゅっと握る。
「歩…美？」
「素直になればいいんだよ…」
握った手により一層力を入れて、力強く言った。

「歩美が絶対受け止めてあげる！！…約束するから…！！」

哀ちゃん。
歩美にも出来る事、ひとつ見つけたよ。
コナン君の辛いこと、一緒に耐えてあげるの。

「約束…するから」
「…ん…歩美…」

ありがとう…。
コナンの口から出た呟くような声だったが、しっかりと歩美の耳には届いていた。

★

その後、二人は言葉を交わさないまま歩美の家の前まで歩いた。
「ありがとう…送ってくれて」
「いや。…じゃあ、3学期な」
コナンは吐き捨てるようにそう言った後、くるりと歩美に背を向ける。
「…コナン君っ」
歩美は少し慌てた様子でコナンを呼び止める。
コナンも少し驚いて、ゆっくり振り返った。
「ねぇコナン君。歩美、力になれないかな?よかったら一番コナン君の側にいられる人として…」
卑怯なタイミングだとわかっていた。
彼の人格が弱っているところにつけこんでいるのだと。
でも今を逃したらもう言えないような気がした。
いつまでも一緒にいたいという自分の気持ちを…。
小学生の頃とは違って、今ではすっかり重くなったその一言を。
「歩美…」
コナンはしばらく目を丸くして驚いていたが、フッと笑って言った。
「…歩美はいつでも側にいてくれたよ。大事な仲間だと…思ってる」
仲間…か。
「じゃ…な」
そう言ってコナンは早歩きで歩いていった。
彼は誤魔化そうとしていたが、わかっている。
自分は今、フラれたのだと。
それでも久し振りに見たコナンの笑顔に、歩美は自然と心が穏やか

になっていた。

「メリークリスマス…コナン君…」

歩美は帰路について遠ざかっていくコナンの背中に、小さくそう呟いた。

★

ずっとずっとそばにいて
大好きな君を見つめてたい

もっと好きな人強く
抱きしめなさいと雪は降るの

メリクリ／ＢｏＡ

（後書き）

タブー破りました、もちわざとですｖ
わざわざクリスマスにしけた話を書いて、どれだけ明莉のクリスマスがしけってるのかバレバレですな。

コナンがコナンのまま中学生になったら。
ひねくれて同級生からシカトくらうんじゃないかというのが明莉の自論です。
あくまでも自論ですヨ！石を投げないで下さい！↑
そんなひねくれボウズを支えるのは、エンジェル２代目歩美ちゃんだったらいいなという妄想。
たぶんひねくれコナン君は蘭ちゃんの前ではいつも通りに過ごそうとするんだと思うんで…★

では皆さま、よいクリスマスを（＾Ｕ＾）ノシ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7705f/

クリスマスの約束

2010年11月27日07時34分発行